上越教育大学研究紀要　第30巻　平成23年２月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 30, Feb. 2011

延慶本『平家物語』に見られるオノマトペ

中　里　理　子*

（平成22年９月30日受付；平成22年11月１日受理）

要　　旨

平家物語諸本のうち，古態を残すと言われる延慶本を対象にオノマトペを抽出し，その特徴を整理した。一般にオノマトペは和語のオノマトペ（和語系オノマトペ）を指すが，本稿では漢語由来のもの（漢語系オノマトペ）も取り上げ，比較しながら特徴を見た。延べ語数は和語系の方が多く，異なり語数は漢語系の方が多い。和語系のオノマトペの特徴は，まず，擬音語は延べ語数で擬態語を上回っており，弓矢，刀，軍勢の動きなど，合戦に関する語が多く表現が固定化する傾向が見られた。また，擬態語は泣く様子，人物の素早い動作や力強い動作を表す語が多い。漢語系オノマトペの特徴は，まず「音の描写」は絃，雨，風の音の３種に限られていた。また擬態語は自然描写に関する語が多く，心情描写とともに，和語系オノマトペに足りない部分を補っていたことが窺われる。

KEY WORDS

和語系オノマトペ	Onomatopoeia of Japanese Origin	漢語系オノマトペ	Onomatopoeia of Chinese Origin
擬音語	Imitative Word	擬態語	Mimetic Word
自然描写	Description of Nature		

１．平家物語諸本とオノマトペの研究

平家物語に見られる語彙の特徴の一つとして，オノマトペ（擬音語・擬態語）の使用が指摘されている。古くは山田孝雄の『平家物語の語法　下』（1954年・寶文館，初出1914『平家物語につきての研究　後編』）に，「寫音または擬聲の「エイ」「ヲウ」「カラカラ」「ハ」「ト」「カハ」「カフ」「カラリ」「キクリ」などの用例に頗る多き」とあり，日本古典文学大系『平家物語　上』（1959年・岩波書店）の「解説」には，「平家物語を特徴づけている語彙」に「やまとことばの，しかも日常卑近な口頭語だったらしいものが多く用いられている」と述べられ，その一つに「擬声語・擬態語」が挙げられている。また，西田（1978）では，「語彙・用語面からのアプローチ」の一つに「擬声語，擬態語，色彩語など感覚的な語」が挙げられている[1)]。このような指摘が古くからなされているものの，平家物語のオノマトペ（擬音語・擬態語）に焦点を当てて研究したものはほとんど見られない[2)]。そこで，『平家物語』のオノマトペの特徴を整理するために，平家物語の諸本を対象にオノマトペの調査を行っていくこととした。

『平家物語』の諸本は，周知のように語り本系と読み本系とに分けられている。前者に分類されるものには，覚一本，屋代本，百二十句本などがあり，後者に分類されるものには，延慶本，長門本，源平盛衰記，四部合戦状本，源平闘諍録などがある。諸本を調査していくにあたり，まず本稿では『延慶本平家物語』（以下，延慶本）を取り上げ，そこに見られるオノマトペの特徴を整理する。

延慶本は書写年代が確実な本とされ，鎌倉時代の日本語を考える国語研究の基礎とされている[3)]。語り本系の代表とされる覚一本に対し，延慶本は読み本系の代表と考えてよいだろう。小川（2008）には，延慶本は「平家諸本の中でも「古態」を伝えるもの」であり，「延慶本と覚一本との文章を比較すれば，延慶本のような雑纂な文体から，覚一本のような洗練された文体へと進む形成過程もよく分かる」と述べられている[4)]。本研究でも，古態である延慶本を調査した後に，対照的な覚一本と比較したいと考えている。また，延慶本が読み本系に分類されるため，漢語由来のオノマトペ（以下，漢語系オノマトペ[5)]）の出現率が高いと思われることも理由の一つである。いわゆる和漢混淆文によって書かれた平家物語には，そもそも漢語系オノマトペの出現率が高いことが予想されるが，特に読み本系の本文には多く見られるのではないかと考えられる。従来のオノマトペ研究では，もっぱら和語系オノマトペが対象とされてきたが，日本語のオノマトペに含められるような漢語系オノマトペが存在すると考えられる。特に古語においては，漢語系オノマトペの役割も大きいと考えられるため，和語系と同様に研究対象として取り上げることとした。

以上の理由から，平家物語の調査に当たって，まず読み本系の延慶本を選びオノマトペを収集し，特徴を整理する

*人文・社会教育学系

こととした。調査資料には，汲古書院刊『校訂延慶本平家物語』[6] を使用した。

なお，本稿では，延慶本のオノマトペ調査によって鎌倉時代語の特徴を見ようとするものではない。読み本系の本文に見られるオノマトペを整理し，今後調査する語り本系の本文に見られるオノマトペと比較するための一資料とすることを目的としている。

2．和語系オノマトペと漢語系オノマトペ

現代語においても古語においても，一般にオノマトペと称する場合には和語系オノマトペを指すが，通常使用している語の中に漢語系オノマトペと言うべきものがある。例えば，擬音語に「汽車がゴウゴウ（轟々）と走り過ぎる」「杭打つ音がトウトウ／チョウチョウ（丁々）と響く」などがあり，擬態語に「太陽がサンサン（燦々）と照る」「目がランラン（爛々）と光る」「コツコツ（兀々）と勉強する」などがある。これらは漢字表記があり，オノマトペとしての特性，すなわち，日本語としての言語音と意味内容との間のつながり（有縁性）が感じられないものも多い。しかし，中には漢字表記を持つ漢語であるという意識が薄れ，和語のオノマトペと同様に言語音の響きと意味内容の対応が容易に連想できるものもある。日本語の中で，漢語系オノマトペは，和語系オノマトペの発達に影響を与えていると考えられ[7]，中世・近世には日常語の中にもいくつもの漢語が見られることから，平家物語のオノマトペを研究する際にも取り上げるべきであると考える。和漢混淆文という文体特徴から見ても，漢語系オノマトペが多用されていることは容易に想像され，和語系オノマトペの特徴を考えるに当たっても参考になると思われる。

漢語系オノマトペは，金田一（1978）によって，語形から以下のように分類されている。（例は一部抜粋した。また二（10）漢字三字，（11）漢字四字を見やすく別項に改めた。）

一　漢字一字のもの　　例　燦（として）　恬（として）
二　漢字二字のもの
　（1）「－焉」の形のもの　　例　忽焉　　（2）「－乎」の形のもの　　例　断乎
　（3）「－爾」の形のもの　　例　完爾　　（4）「－若」の形のもの　　例　自若
　（5）「－如」の形のもの　　例　突如　　（6）「－然」の形のもの　　例　愕然
　（7）同じ語根を重ねたもの　例　怏々　煌々　　（8）同じ子音の拍を重ねたもの　例　恍惚　颯爽
　（9）同じ韻をもつ拍を重ねたもの　例　安閑　惨憺
三　漢字三字のもの　　例　欣々然　洋々乎
四　漢字四字のもの　　例　侃々諤々　意気揚々

この分類に従って漢語系オノマトペを認定することとする。ただし，全ての分類を漢語系オノマトペとして取り上げることはしない。日本語におけるオノマトペとして考えた場合，和語系オノマトペの語感に近いものを取り上げるのが妥当であろう。現代語の和語系オノマトペの主な語形を挙げると，以下のようになる。

ＡッＡンＡ－ＡＡッＡッＡＡッＡッＡンＡンＡ－Ａ－
ＡＢＡＢッＡＢンＡＢ－ＡＢリＡＢリンＡＢリッＡ－ＢリＡＢ－リ
ＡッＢリＡッＢンＡンＢリＡＢＡＢＡＢＡＢッＡＢＢＡＢＢ－ン
ＡＢＣＢＡＢンＣＢンＡＢリＣＢリ

漢語系オノマトペの語形と和語系オノマトペの語形を比較すると，和語系の「ＡッＡッ」「ＡンＡン」「Ａ－Ａ－」「ＡＢＡＢ」が，漢語系の「二（7）同じ語根を重ねたもの」と重なり合っている。和語系オノマトペは「トントンと叩く」「シトシトと雨が降る」のように畳語形式が多いとされており，漢語系オノマトペも畳語形式を取り上げるのがよいと思われる。また，「ドタバタ」「デコボコ」「ムシャクシャ」のような「ＡＢＣＢ」の形式や，「ＡッＡッ」「ＡンＡン」「Ａ－Ａ－」「ＡＢンＣＢン」「ＡＢリＣＢリ」の形式に見るように，語尾の音を合わせる形式が和語系オノマトペに見られることから，それに近い漢語系の「二（9）同じ韻を持つ拍を重ねたもの」も調査対象に加えることとする。古語の和語系オノマトペは，上記の形式以外に「さと」「きと」のような「Ａ」，「とどろ」のような「ＡＢろ」，「たわわ」のような「ＡＢＢ」などの語形がある。今回の調査では「Ａと」の語形が加わっている。今後の調査においても，古語のオノマトペに特徴的な語形も調査対象に加えていく。

3．延慶本に見る和語系オノマトペ

抽出した和語系オノマトペを五十音順に整理したものを以下に示す。〈　〉内は，オノマトペが表す内容（多くは，被修飾語にあたるもの）である。数字は二回以上現れた語に対して記した。「さと」のような一語のものは紛れやすく，また，「丁（ちゃう）ど」のように「と」が濁音化している語もあるため，すべて「と」を付して示した。原文はカタカナ漢字交じり表記であるため，それに従い，漢字表記の場合には（　）に読みを示した。〈　〉内については，内容を表す場合にはひらがな表記，被修飾語を示す場合にはカタカナ漢字表記とした[8]。

調査対象から外したのは次に該当するものである。

1）「ぎぎめく」「どどめく」「ひひめく」など，接尾辞「めく」がつく動詞の形になっているもの。
2）「きらきらし」など，形容詞の形になっているもの。
3）「しぶしぶと」「やすやすと」のように，畳語形式であっても，語基部分（「渋い」「易い」など）の独立性が高く，さらに一般語彙として副詞的に多く用いられているもの。
4）「つやつや」「ちとも」のように，陳述副詞であるもの。ただし，「ちとまどろむ」のように，情態副詞であり，様子・状態を表しているものは取り上げた[9]。
5）「こまごま」「はるばる」など，畳語形式の後項が濁音化しており，語基部分が「こまかい」「はるか」のように一般語彙として意味を持つもの。例外として，「ほのぼの」「さめざめ」のように語基の独立性が低いものはオノマトペとして扱った。

【和語系オノマトペ】

〇擬音語

アト２〈悦ブ・云イ合フ〉　ガブト〈海ヘ入ル〉　カラカラト２〈咲フ・タルヒガ鳴ル〉　カラリト〈薙刀で甲に打当てる〉　キイリト〈門の音〉　ザト13〈橋ノ上ヘ上ル・河ノ向ヒ側ニ着ク・アケテ通ス２・河ヲ渡ル・河ヲ渡ス２・引ク・馬ヲオロス・河ヘ打入レ・向岸ニノボル・引テノク・白旗ヲサス〉　ザツト６〈渡ル・打ワタス・渡ス・破イテ出ヅ・引キノク・汀ヘ馳上ル〉　サラト２〈刀ヲ抜ク２〉　サラサラト２〈念珠ヲオシモム・トカゲガ匍フ〉　サラリサラリト〈矢ヲツマヤル〉　サワサワト〈下人や冠者原の様子〉　丁（ちゃう）ド４〈戸ヲ立テル・打折レテ・刀ヲ合ス・切ル〉　打（ちゃう）ド〈刀デ頸ヲツカフ〉　ヅブヅブト〈海ノ底ニ入ル〉　ドト３〈走リテ倒ル・時ヲツクル２〉　ドウド４〈落ツ３・倒ル〉　ドツト〈咲フ〉　ハト10〈咲フ８・時ヲツクル・押寄ス〉　バト２〈立上ガル・押寄ス〉　ハタト８〈勧請の句を打ち上げる・障子ヲ立テ・矢ガ当ル・手ヲ打ツ・懸ケ破ル・射ル・刀が鞘にささる音・刀ヲ合ス〉　ハタハタト２〈爪ハジキ・鎧の水を打つ音〉　ハラハラト４〈扇ヲツカフ４〉　ヒフット〈射切ル〉　ヒヤウド〈矢ヲ放ツ〉　兵（ヒヤウ）ド７〈射ル７〉　ホトホトト２〈戸ヲタタク２〉

〇擬態語

アザアザト〈残る〉　アラアラト〈山風〉　オヅオヅ〈戸ヲ開ケ〉　オメオメ２〈語ル・逃グ〉　キト13〈見ル２・召シテ進ゼヨ・立寄リ給ヒ・オトナフ・思出シ・暇ヲタマワル・恥ニアフマジ・見回ス・渡シマイラセヨ・忍テアルカバヤ・目ヲ見合ス・見知ルマジキ〉　キツト〈見上グ〉　屹（きつ）ト〈押シ開カレ〉　クボクボト〈目ガ落入ル〉　クルクルト〈廻ル〉　サト８〈涙ガ浮ク・太刀ヲ抜ク・庭ヘ下リテ・オリアフ・ヒカル２・チル・二ツニサケ〉　サツト３〈障子ヲ開ケ・アケテ通ス・血がコボレカカル〉　サメザメト21〈泣ク19・打泣ク・涙ヲ流ス〉　シヅシヅト３〈落行ク２・問フ〉　シトド〈乗下ガル〉　シトシトト〈ナデクダス〉　シホシホト〈直衣の様子〉　シヲシヲト３〈馬の様子・人が濡れた様子・渡ル〉　シャクト〈越ユ〉　スクスクト〈参ル〉　スルリト３〈渡ス・渡ル・指寄ル〉　チト７〈ヒラム・打マワル・カタムケヨ・マドロム２・息ガ通フ・寝入ル〉　ツト29〈キリオトス・逃グ・入ル３・寄る10・出ヅ６・ノボル・参ル・通ル２・先立ツ・射ヌク・射出ス・オドリノク〉　ツクト〈立ツ〉　寸々（づたづた）ニ〈大蛇ヲ切ル〉　ツルリト〈食フ〉　ヌケヌケト〈取ラル〉　ハト〈興ザム〉　ハタト２〈ニラム２〉　ハラハラト17*1〈涙ヲコボス・涙ヲ落ス４・涙ヲ流ス２・泣ク９・哭ク〉　ヒシト３〈並ビ居ル・取付ク・面影ガ身ニ副フ〉　ヒシヒシト２〈思召シ立ツ・物の具をかためる〉　ヒタト４〈取ラヘテ・馬ニ乗ル３〉　ヒラヒラト〈宝剣が光る〉　フツト〈甲の緒を引きちぎる〉　フサフサト〈黒髪〉　房々（ふさふさ）ト〈御グシ〉　ホノボノト7〈夜ガ明ケル７〉　ミシト〈ダク〉　ムズト11〈取ル２・座ニツク・組デ落ツ・打ツ・ヰル・フム・引キアオノク・門ヲヲシアケ・袖ヲ押ヘテ・刀ヲ合ワス〉　ヤミヤミト〈ナル〉　ユラユラト３〈歩ミ寄ル・黒髪・御グシ〉　ヨロヨロト〈立つ〉　ワナワナト〈フルヘテ〉　ワラワラト〈破レタル〉　ヲヅヲヅ〈伺ヒヨル〉　ヲメヲメト３〈居ル・降人ニナル・ナル〉　ヲロヲロト２〈見ル・引退ク〉

＊1「ハラハラト」は「咲（わらふ）」に係る例が1例あった。「築垣ノ外ニハラ〳〵ト咲声頻也（巻四・三十「都遷事」）という例であるが，この部分は頭注8に「右に「哭歟」と傍書あり」と書かれているため，それに従った。

和語系オノマトペは，延べ語数153語，異なり語数63語である。このうち，擬音語は延べ82語，異なり24語。擬態語は延べ71語，異なり42語。擬音語にも擬態語にも使われている語は「ハト」「ハタト」「ハラハラト」の3語であった[10]。延べ語数で見ると擬音語の割合が高く，これは，古くは前項で触れた山田（1954）の指摘，現代でも『日本語学研究事典』「平家物語」の項に「写音・擬声の和語副詞に富む（エイ・ヲウ・カラカラ・カラリなど）」[11]という指摘がある通りである。頻度が高いのは合戦に関する語で，中でも，①弓矢に関するもの，②刀に関するもの，③軍勢や兵の動きに関するもの，が多い。

①弓矢に関するものには，「ヒャウド／兵ド」8例，「ハタト」2例，「ヒフツト」「サラリサラリト」1例ずつがある。「ヒャウド／兵ド」は全て「射ル」行為に係って用いられており，定型化した表現であったことが窺われる。

②刀に関するものには「丁ド／打ド」4例，「ハタト」2例，「カラリト」「サラト」1例ずつがある。弓矢の方がオノマトペは多く使われていたが，「丁ド／打ド（ちゃうど）」「ハタト」は刀を使う時に多く用いられた語である。擬音語で漢字表記されるのは①の「兵ド」と②の「丁ド／打ド」の2語だけであり，用法が固定化した定型的表現であったことが窺われる。

③軍勢や兵の動きに関するものは，河や海での戦いが多いために「ザト」13例，「ザツト」6例，「ヅブヅブト」1例など，水に関するオノマトペが多くなっている。また，「時をつくる」声に「ドト」「ハト」，軍勢が「押し寄す」音に「ハド」「バト」，軍勢が笑う様子に「ドット」「ハト」が使われており，群衆が立てる音声は「ドト」「ドット」「ハト」「バト」で全て対応させていることがわかる。

全体を通して，擬音語は擬態語と比較して異なり語数が少なく，音声を表す際にはいくつかのオノマトペに当てはめて表現していたようである。

一方，擬態語は異なり語数が多く，様々なオノマトペが使い分けられているが，頻度の高い語がいくつかある。5例以上のものを挙げると，「ツト」29例，「サメザメト」21例，「ハラハラト」17例，「キト」13例（「キツト／屹ト」2例），「ムズト」11例，サト8例（「サツト」3例），「チト」7例，「ホノボノト」7例，「オメオメ／ヲメヲメト」5例である。

「ツト」「キト」は，狂言の台本では「つっと」「きっと」の形で多く見られるオノマトペで[12]，人の動作を表す一般的な表現であったのではないかと思われる。延慶本では，「ツト」の例のほとんどが「入る・出づ・寄る・参る・通る」など移動を表す語とともに使われており，すばやい出処進退の様子を表現する時の定型的表現になっていることがわかる。「キト」は「見る／見回す」など見ることに関する例が6例あり，現代語の「きっと見る」につながる使われ方となっている。また，「キト」の特徴は他の語に比べて会話文に多く見られることである。和語系オノマトペ153例中，登場人物の会話部分で見られた語は12例，このうち7例が「キト」である。これらは次に示すように，ほとんどが命令形や打ち消し表現と共に用いられている。

・「大トノヰノ綾ヲリガ中ニ，目アカク手キヽタル二人バカリ，キト召テ進セヨ（巻一・十七）
・「京ヲ王城ト云ケルモ，ヨクゾ申ケル。西方ニ高峯アリ。若（もし）ノ事アラバ，逃籠タラムニ，キト恥ニアフマジ」（巻四・七）

現代語の陳述副詞「きっと」に残る用法は，「命令や推量の表現を導く。その実現を確信する意味を表す」（『角川古語大辞典』）ものであるが，延慶本に見られた用法はそれとは異なり，一種の強調表現として使われながら「急に起り，かつ瞬間的に終始する状態の変化や動作のさま。」「鋭く確信をつくような変化・動作に用いられる」（『角川古語大辞典』）という意味で用いられている[13]。

「サメザメト」「ハラハラト」はどちらも泣く表現として使われている。笑いの表現が擬音語（「カラカラト」「ハト」「ドット」）にのみ見られたのとは対照的である。作品の性質上，笑いの表現より泣く場面が多いことも関わっているが，オノマトペの使用例も多く見られた。2語とも「泣く／涙を流す／涙を落とす」など，係る語句が固定しており，定型的表現になっている。

「ムズト」は主に合戦場面での武士の力強い動作に用いられている。他に力強さを表す擬態語に「シトド」「ミシト」があるが，もっぱら「ムズト」が使われていたようである。「サト／サット」は，素早い動作や物の動きを表す際に用いられている。「チト」は数量が少ないことを表す点でオノマトペとしての象徴性は低い。「ホノボノト」は7例全てが「夜が明ける」形容に用いられており，固定化した表現である。

４．延慶本に見る漢語系オノマトペ

和語系オノマトペと同様に，抽出した漢語系オノマトペを五十音順に整理したものを以下に示す。〈　〉内は，オノマトペが表す内容（多くは，被修飾語にあたるもの）である。２節で述べたように，今回の調査では「同じ語根を重ねたもの」「同じ韻を持つ拍を重ねたもの」を対象とした[14]。

漢語系の中にも音を形容するオノマトペがあるが，和語系の擬音語のように実際の音声を言語音に写したものとは考えにくく，同等に扱えないため，「音の描写」として示す。

【漢語系オノマトペ】

〇音の描写

索々２〈風の音・絃〉　颯々〈涼風〉　瑟々〈松風〉　粛々〈雨の音〉　蕭々〈雨の音〉　嘯々〈雨の音〉　竊々４〈小絃２・絃２〉　錚々〈絃〉　糟々３〈大絃２・絃〉*2

〇擬態語

愛々〈顔〉　依々〈恨ミ〉　陰倫〈西日〉　裔々〈海中にいる様子〉　炎々〈ほのお〉　遠々〈過去〉　峨々８〈巖路・松山・山４・青山・翠嶺〉　嚇々〈体（てい）〉　赫奕３〈海上・光・光明〉　閑関〈鶯語〉　緩々〈聞キ居ル〉　巍々〈威徳〉　急々〈下流〉　皓々〈風〉　耿々３〈燈・露の駅・残燈〉　広々〈家の内〉　滉瀁〈松〉　寂漠〈山家〉　舟々〈浮かぶ〉　蕭々〈秋の夜〉　壌々〈露〉　瀁々〈海水〉　譲々〈露〉　深々〈人もなく〉　森々〈巖松〉　寸々〈愁腸〉　凄々〈微陽〉　勢々〈卿相雲客〉　掣々〈波上に居る〉　忿々〈胸の火〉　蒼々３〈天心・月・翠〉　蔟々２〈山２〉　湛々〈水〉　潭々〈深淵〉　団々〈池〉　遅々〈春日〉　沈々２〈雲海２〉　滔々３〈清水・河水・浪音〉　堂々〈尊容〉　漠々〈寒嵐〉　ひつひつ*3〈枝〉　眇々９〈浜路・蒼波２・前路・磯・野・眺望・風・山〉　淼々*4〈雪水〉　平々〈板〉　片々５〈煙３・霞・余炎〉　茫々５〈海上・月の影・流れ・碧落・波〉　漫々16〈湖上２・海４・蒼海４・海上４・激海・波〉　万々〈下流〉　明々４〈文道・光２・影〉　冥々２〈天闇く・流転の衢〉　綿々２〈恨みの心２〉　熊々〈悲しみの涙〉　悠々〈生死〉　幽々２〈橋桁・春雨〉　葉々〈草〉　幼々〈哭く〉　漸々〈未来〉　乱々〈時〉　霊々〈錦帳〉　冷々〈風〉　連々〈涙〉　老々３〈人の様子〉　ソウソウニ〈物狂わしい様子〉　ベウベウト〈家中〉*5

＊２　本文に「糟々竊々」とあったが，「糟々」と「竊々」にそれぞれ分けて示した。
＊３　「ひつ」は「風」に「必」と書く文字。
＊４　原文では別字。「水」の下に「氵」と「取」。頭注に「読み未詳」，他字の誤写かとある。「北原本は「淼」とする」とあり，それに倣った。
＊５　「ソウソウニ」「ベウベウト」の二語は，カタカナ表記されている。意味の上から「忿々」「眇々」と同語と考えられるため，異なり語としては数えない。

漢語系オノマトペは，延べ134語，異なり71語である。このうち，音の描写は延べ15語，異なり９語。擬態語は延べ119語，異なり62語である。音の描写に比べて圧倒的に擬態語が多く，種類も豊富である。和語系オノマトペが延べ153語，異なり63語であることと比べると，延べ語数は和語系よりやや少ないが，異なり語数は多いことが見て取れる。

まず，音の描写を見てみると，楽器の絃の音，雨の音，風の音，の三種に使われている。これらに対応する和語系オノマトペは，延慶本には１例もない。延慶本では，絃の音，雨の音，風の音はもっぱら漢語系オノマトペによって表現されていると言える。延慶本に限らず古語（中古・中世）のオノマトペとして考えても，これらの音を表す和語系オノマトペはほとんどない。古語において，絃・雨・風の音を描写するのは，和文脈というよりは漢文脈で表現されるものであったのだろう。使用されている場面は，漢籍からの挿話の箇所だけではなく，師長が琵琶を弾じた音色に対しての村人の形容（巻三）など，日本を舞台とした挿話の中にも見られる。

次に擬態語を見てみたい。和語系オノマトペの擬態語が延べ71語，異なり42語であるのに対して，漢語系は延べ119語，異なり62語であり，漢語系オノマトペのほうが種類も出現数も多いことがわかる。和語系と同様に５例以上見られるものを挙げると，「峨々」８例，「眇々・ベウベウ」10例，「片々」５例，「茫々」５例，「漫々」16例となっている。これらは山や海，湖，野，霞など，すべて自然の風物や景観を表すものを描写するオノマトペである。他の語も含めて，擬態語は「山」と「海・河・波・流れなど水に関する風景」を表す語が多い。山は，「峨々」の他に「蔟々」「眇々」が用いられ，海や河など水に関するものは「漫々」の他に「急々」「瀁々」「湛々」「潭々」「滔々」

「眇々」「淼々」「茫々」「万々」が用いられており，山の描写よりも種類が多い。これは，作品の舞台に海や河が多く登場することにもよると思われる。音の描写同様，これらに該当する和語系オノマトペは作品中になく，古語のオノマトペの範囲にもほとんど見られない。漢語系オノマトペの中の，特に擬態語は，人物描写や心情に関わるものよりも，自然描写に関わるものに偏っている。これも，漢語系オノマトペの大きな特徴であろう。

漢語系オノマトペが使用されている場面を，中国や日本を舞台とした挿話[15]，漢詩や願文などの文面，物語の場面，に大きく分けてみると以下のようになる。

	挿話(中国)	挿話(日本)	文面	物語場面
音の描写	0	7	8	0
擬態語	14	46	12	49

音の描写も含めて，中国の話を挿入する場面での使用は少なく，日本を舞台とした場面での使用が多い。挿話だけでなく，次のような物語場面中で使用される例も多く見られる。

・（略）御ソバニ有ナガラ，チトマドロミタリケルヒマニ，ヤワラ舟ノハタニ立給タレバ，漫々タル海上ナレバ，月オボロニカスミワタリテ，イヅクヲ西トモワカネドモ，月ノイルサヲ山ノハニ向テ（巻九・三十）

このように，漢語系オノマトペが中国の話を挿話として引用する部分や漢詩・漢文だけでなく，日本にまつわる話，物語の場面にも多く用いられていることは，和語系オノマトペと同様に，声喩として，様子・状態を生き生きと表現するために使われていることを示しているのではないだろうか。

また，延慶本は文体の異なる部分が見られることが指摘されている[16]が，本文の文章形態は，漢文（和化漢文），漢文訓読調，和文調の色合いの強い和漢混交文，とが混在している。漢語系オノマトペは，いずれかの文体に偏るのではなく，それぞれの文体で使われている。以下に例を挙げる。

〈漢文で使われている例〉

・前ニハ海水漫々トシテ而浮ベ二真如之光リヲ一，後ロニハ巖松森々トシテ而風奏ス二常楽之響ヲ一。（巻三・十三）〈書面の文章〉

・漠々（バクバクタル）寒嵐之底ニ臥テ二旅泊ニ一而破リレ夢ヲ，凄々（セイセイタル）微陽之前ニ，望デ二遠路ヲ一而極ムレ眼ヲ。（巻五・二十四）

〈願文の文章〉

〈漢文訓読調の本文で使われている例〉

・或ハ海辺水駅ノ幽ナル砌ニハ，蒼波眇々トシテ，恨ノ心綿々タリ。或ハ山館渓谷ノ暗キ道ニハ，巖路峨々トシテ，悲ノ涙熊々タリ。（巻二・二十八）

・遅々タル春日ノ遅シテ難レ暮（くれがたき）ニモ，愛念ノ眦ヒワスラレズ。蕭々タル秋夜ノ長シテ難レ曙（あけがたき）ニモ恋慕思イトフカシ。（巻七・二）

〈和文調に近い和漢混淆文で使われている例〉

・縦（たとひ）一丈二丈ノ木ナリトモ，油黄島ニテ漫々タル海ニ入レタラムガ，新羅，高麗，百済，鶏旦ヘモユラレユカデ，安芸国，又新宮マデヨルベシヤハ。（巻二・三十一）

・（略）子息狩野五郎親光ヲ招寄テ，「人手ニカクナ。我頸打（われくびうて）」と云ケレバ，親光，父ノ首ヲ切ム事ノ悲サ，父ヲ肩ニ引懸テ山ヘ登リケルニ，峨々タル山ナレバ，輒ク可レ登トモオボヘサリケレバ，トビニモ延ヤラズ，（略）（巻五・十三）

これらを見ると，漢文，漢文訓読調の本文はもちろん，和文調に近い和漢混淆文の本文でも，違和感なく漢語系オノマトペが使われているのが見て取れる。和文調の色彩の強い箇所は，一文が長く連綿と続いていく文章となっており，文章のリズムとしては，漢文や漢文訓読調の簡潔な調子と大きく異なっているが，漢語系オノマトペは，和文調のリズムの中にも自然にとけ込んでいる。先にも触れたが，漢語系オノマトペは自然描写に多く用いられており，これらに該当する和語系オノマトペが発達していなかったことが窺われるとともに，和語系オノマトペを必要としないほど，自然描写に関する漢語系オノマトペが豊富にあり，文章中で使用することが珍しいことではなかったことを示していると言える。

漢語系オノマトペが和語系と同様に使われたらしい例として，漢字表記をせず，カタカナ表記をしている語が２例あった。以下に原文を示す。

・文学答（こたへていはく）云「（略）カヤウニ文学ハ心ソウ〳〵ニシテ，物狂シキ様ニハ侍レドモ，父ニモ母ニモ孤（みなしご）ニテ候之間，親ヲ思フ志今ニナヲアサカラズ。（巻五・五）

・衆僧等，西北ノ方ニ向テ，空ヲ飛テ炎魔羅城ニ至ル。王宮ヲミルニ，家中ベウ〜〜トシテ，其ノ内広々タリ。
（巻六・十四）

漢字表記ではないということは，文章語としての漢語の意識が薄れていることをうかがわせる。「ベウベウト」は，「眇々ト」の表記で９例見られ，使用率の高い語である。遠くはるかに広がる様子を表す際に用いられるが，これに該当する和語系オノマトペはなく，もっぱら「眇々」あるいは「渺々」が用いられていたため，漢語の意識が薄れていることも考えられる。

「ソウソウニ」は「忿々ニ」と漢字表記で書かれている例が１例ある。

・カクテ文学，冬ノ宵カラ漏シ遅テ愁腸寸々ニ易レ断，春ノ天日斜ニシテ，胸火忿々ニ難レ拭ヒシテ，諸国ヲ流浪シテアリキケルガ，都へ帰リ廻リテ高雄ノ辺ニスミケリ。（巻五・四）

カタカナ表記の例と同じく，文学の心の状態を表している語である。和語系オノマトペで心情を表すものは，延慶本に見られる範囲では，「オヅオヅ（ヲヅヲヅ）」「オメオメ（ヲメヲメ）」「ヲロヲロ」があり，それに準ずるものに「シヲシヲ」がある。オノマトペ全体数から見ると，かなり種類が少ないと言える。現代語には「いそいそ」「いらいら」「むっと」など心情を表す和語系オノマトペは多いが，中古・中世に見られる古語のオノマトペには，心情を表すものは少ない。「忿々ニ」は「いそがしいさま。あわただしいさま。また，さわがしいさま。」[17] を表すが，カタカナ表記，漢字表記ともに，「文学」という人物の落ち着かない心の状態を表している。和語系には該当するものがなく，心情描写の点でも漢語系オノマトペに頼っていたのではないだろうか。

５．まとめ

延慶本に見るオノマトペの特徴を以下にまとめる。

（１）延べ語数は和語系オノマトペのほうがやや多いが，異なり語数は漢語系オノマトペのほうが多い。
（２）和語系オノマトペの擬音語は，延べ語数で擬態語を上回っている。異なり語数が少ないことから，使われるのは限られた語の範囲であると言える。弓矢，刀，軍勢の動きを表す語など，合戦に関する語が多い。
（３）弓は「ヒヤウド／兵ド」，刀は「丁ド／打ド」「ハタト」でほとんど表しており，表現の固定化が見られる。擬音語で漢字表記されるのが「兵ド」「丁ド／打ド」の二語だけであることからも，固定化の様相が見て取れる。
（４）軍勢の動きを表す擬音語は，合戦の舞台が海や川であることを反映して，水の中の動きを表す「ザト」「ザット」が多い。その他，軍勢の笑い，時を作る声，押し寄せる音などは「ドト／ドット」「ハト」でほとんどが表されており，表現の固定化が見られる。
（５）和語系オノマトペの擬態語は，泣く様子を表す語「サメザメト」「ハラハラト」が多い。また，「ツト」「サト／サット」など，人物の素早い動きを表す語が多い。力強い動作はもっぱら「ムズト」で表されている。
（６）漢語系オノマトペは，延べ語数，異なり語数ともに音の描写よりも擬態語のほうが圧倒的に多い。
（７）漢語系オノマトペの「音の描写」は，楽器の絃の音，雨の音，風の音の３種に限られている。これらに該当する和語系オノマトペはなく，漢語が使われていたのであろう。
（８）漢語系オノマトペの擬態語は，和語系オノマトペに比べて延べ語数，異なり語数ともに多く，種類も豊富で出現数も多い。
（９）漢籍からの挿話だけでなく，日本を舞台とした挿話，さらには，物語の一場面に漢語系オノマトペが登場する。
（10）漢文，漢文訓読調だけでなく，和文調の色彩の強い和漢混淆文にも，漢語系オノマトペが同じように使われている。
（11）全体に自然描写に使われているものが多い。特に海・川・波・流れなど水に関する風景を形容する語と，山を形容する語が多い。自然描写を表す和語系オノマトペがほとんどないため，漢語系オノマトペが使われていることが考えられる。
（12）心情を表す漢語系オノマトペも使われているが，和語系オノマトペに心情を表す語が少ないことから，漢語系オノマトペも使われていると考えられる。

６．今後の研究課題

今後，研究を進めるに当たっては，以下のようなことを考えている。

（１）１項で触れたように，古態を残していると言われる読み本系の延慶本の調査をしたので，次は，語り本系で

「平曲詞章として文芸的にも完成した姿を示す」[18] と評される覚一本の調査をしたいと考えている。覚一本では，延慶本より和語系オノマトペが多く見られると予想されるので，比較をしていきたい。また，その後は，読み本系で延慶本平家物語に近いと言われる『源平盛衰記』，延慶本よりも古態であると言われる一面を持つとされる[19] 長門本の調査を試みたい。

（2）漢語系オノマトペの中で，今回は取り上げなかった「＝然」の語形についても，何らかの調査の必要があると思われる。延慶本にも，「悄然」「茫然」などいくつか「＝然」の語形が見られたが，これらは人の心情を表すのに用いられる[20] ことが多い。和語系オノマトペの心情に関する語の発達と漢語系「＝然」は，何らかの影響関係にあるのではないかと考えられる。

（3）今回は，オノマトペが使用された場面について，「漢籍の挿話」「日本を舞台とする挿話」「漢詩や文面」「物語の一場面」という大きな分け方をしたが，道行きの場面，会話の中，合戦場面とそれ以外など，もう少し細かい場面分けをして見ていきたい。

以上の点を考慮し，平家諸本のオノマトペを調査し，相互に比較しながら特徴をまとめたい。

【注】

1）『平家物語の文体論的研究』第二章「平家物語の文体研究」38頁。西田は，「これらの語のとり入れ方によって，その説話，平曲の句，などの文体的印象が異なる」と述べているが，「擬声語，擬態語」を取り上げているのは，これらの語群がある程度多く見られることに他ならないだろう。

2）西田（1990）では，オノマトペを取り上げた研究に猿田（1976）と中里（1980）を挙げているだけであり，管見の限りでは，それ以後もオノマトペだけを取り上げたものは見られない。

3）林　巨樹・池上秋彦編『国語史辞典』（東京堂出版　昭和54年）「平家物語」の項。執筆は西田直敏。

4）小川（2008）第１章「延慶本の書誌・成立」第２章「日本語資料としての延慶本」の記述による。小川は，長門本に古態を認める谷口耕一の説を紹介しつつ「谷口も認める通り，全体としては延慶本の方が古態を示すものであろう」と述べる。さらに「現存する平家諸本の中で鎌倉時代の日本語史料として確実視できるのは延慶本だけである」という。近藤（1989）も「増補系諸本のうちでは，延慶本が完本としては現存最古のものである」としている。

5）筆者は，和語のオノマトペを和語系オノマトペ，漢語由来を漢語系オノマトペと称しているが，本来は現代語において和語のオノマトペに近い働きを持つものに対して「漢語系オノマトペ」と呼んでおり，ここで収集する純粋な漢語についてはふさわしくない名称かと思われる。しかし，本稿でもオノマトペとして取り上げていること，他の名称に代えると混乱を生じること，の二点から，便宜的に漢語系オノマトペと称することにする。

6）『校訂延慶本平家物語』汲古書院刊（平成12～20年）。底本は大東急記念文庫蔵「応永書写　延慶本平家物語」全十二冊。異体字は通行の字体に直し，新字体を採用したとの注がある。本稿もその表記に従った。

7）拙稿，中里（2006）による。

8）〈　〉内は原文通りではないものもある。原文は送りがなが少なく，例えば「呼（よばはり）タリケル」のような場合には読み方に誤解を生じるおそれがあるので，表には「呼バハリタリケル」もしくは「呼ハリタリケル」のように送りがなを補って示した。また，見やすさを考慮し，二字の踊り字「〱」は使用を避け，「アザ〱」は「アザアザ」のように示した。

9）小川（2008）の第３章第１節に程度量副詞一覧があるが，「僅少をあらわすもの」として和文系は「いささか，すこし，やや，わづか」を，訓読系・漢語に「せうせう」を挙げている。「ちと」が入っていないのは，わずかさを表す程度量副詞としては見られていないことを示していると言えるだろう。

10）表記の違いによる「オヅオヅ」「ヲヅヲヅ」，「オメオメ」「ヲメヲメ」，「シホシホ」「シオシヲ」，「キット」「屹ト」，「丁ド」「打ド」，「フサフサト」「房々ト」はそれぞれ同語と判断し，１語として扱った。また，「ハシ〱ト」という語があり，「（高熱の入道に）後ハ帷ヲ水ニヒヤシテ，二間ヲヘダテ、投懸々々シケレドモ，無レ程ハシ〱トナリニケリ」と使われているが，辞典類に「はしはし」という語はなく，北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』（勉誠出社　平成２年）の本文には「ハシ〱」（はしばし）と濁音化していることから，「端々」の可能性もあり，今回は対象外とした。

11）飛田良文他編『日本語学研究事典』（明治書院・平成19年）。

12）拙稿，中里（2010）による。

13）角川書店『角川大辞典』（初版昭和59年，再版平成11年）による。また，山田（1954）では，副詞の「事物の状態を形容したるもの」の中に，「クル〱ト廻る物」「サトヒカリ〱シケリ」「サメ〱ト泣々宣フ」などの例と並んで「キト見ル」「キト召テ進セヨ」の例を挙げている。これは，擬態語として同列に扱っていることを示していると思われる。

14）「散々」は「同じ語根を重ねたもの」であるが，「さんざん」と読み，漢語から離れた意味を持つため，一般語彙化した和語と考え，漢語系オノマトペには含めない。

15）寺などの由来・縁起にあたる部分，人物の過去を紹介する部分，喩えに用いられたもの等もここに分類した。

16）水原（1979），小川（2008）を参照。

17）小学館『日本国語大辞典』（初版昭和49年）「そうそう（忽忽・忿忿・匆匆）の項。

18）林　巨樹・池上秋彦編『国語史辞典』（東京堂出版・昭和54年）「平家物語」の項。西田直敏執筆。
19）谷口（1993）による。
20）明治時代には，漢語「悄然」に「しょんぼり」，「愕然」に「がっかり」と仮名を振られる例が見られる。

【参考文献】

小川栄一　2008　『延慶本平家物語の日本語史的研究』勉誠出版
金田一春彦1978　「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編）角川書店
後藤英次　2006　「延慶本『平家物語』における記録特有語－記録特有語と口語資料（二）－」『中京大学文学部紀要』41号
近藤政美　1989　『中世国語論考』和泉書院
猿田知之　1976　「平家物語に現れた音象徴詞の性格」『立教大学日本文学』35号
菅原範夫　2000　『キリシタン資料を視点とする中世国語の研究』武蔵野書院
谷口耕一　1993　「延慶本平家物語の本文書写の実態について－巻一・巻三を中心に－」『千葉大学日本文化論叢』４号
中里理子　1980　「平家物語（覚一本）に見られる擬声語・擬態語－意味内容からの考察－」『ことば』６号
中里理子　2006　「オノマトペに見る漢語の影響－和語系オノマトペと漢語系オノマトペの関わり－」『上越教育大学研究紀要』25巻２号
中里理子　2010　「大蔵流狂言台本に見る擬音語・擬態語の特徴－虎明本と山本東本との比較から－」『上越教育大学国語研究』24号
西田直敏　1978　『平家物語の文体論的研究』明治書院
西田直敏　1990　『平家物語の国語学的研究』和泉書院
兵藤裕己　1979　「軍記物の流動と“語り”－平家物語論のために－」『国語と国文学』56巻１号
水原　一　1979　『延慶本平家物語論考』加藤中道館
山下宏明　1983　「読みの文体－延慶本平家物語論のために－」『名古屋大学文学部研究論集」85号
山田孝雄　1954　『平家物語の語法』上・下　寶文館　（初出1914年『平家物語につきての研究 国語史料鎌倉時代之部　［第３冊］後編　平家物語の語法　下 』文部省国語調査委員会）

Onomatopoeia in the Enkyô-Bon *Heike monogatari*

Michiko NAKAZATO*

ABSTRACT

Enkyô-Bon which it was said that an old form in many texts of *Heike monogatari* is left about was chosen. Then, onomatopoeia was extracted from that, and characteristics were put in order.

Generally onomatopoeia points at the onomatopoeia of Japanese origin. But, the onomatopoeia of Chinese origin was featured in this paper, too, and characteristics were seen with comparing it.

There is more onomatopoeia of the Japanese word in the whole number, and there is more onomatopoeia of Chinese origin in the kind of the word.

There is more imitative word of the onomatopoeia of Japanese origin by whole number than mimmetic word. As for the imitative word, there were many words about the battle in the bow and arrow, the sword, the movement of the forces, and so on, and an expression showed a tendency to become a fixation. And, there are many words which show a powerful movement with the state to cry with the quick movement as the characteristics of the mimmetic word.

As for the onomatopoeia of Chinese origin, the description of the sound was limited to three kinds of the sound of the instrument, the rainy sound and the sound of the wind. There are many words about the description of nature in the mimmetic word. The onomatopoeia of Chinese origin made up for the part which be short of in the Japanese word onomatopoeia in the description of nature and its feeling description.

* Humanities and Social Studies Education